

教育目標(めざす児童生徒像)

豊かな人間性を培い、主体的、創造的に自己実現をめざす、心身ともにたくましい生徒を育てる。

今年度の指導の重点

- (1) 確かな学力の定着と向上を図る。(基礎基本の定着と活用型の授業改善)
- (2) 豊かな心を育てる。
  - ・一人ひとりが存在感と達成感の持てる集団づくり
  - ・生徒指導、教育相談、特別支援教育の連携体制を強化し、個に応じた支援と豊かな心の育成に努める。
- (3) 将来に夢を持ち、自ら考え行動し、進路を切り拓く力を育てる。
- (4) 小学校や地域との連携を進め、道徳的な実践力を育てる。

調査結果について(調査結果において明らかになったこと)

【学力状況調査の結果】

全国

国語A、数学Aは、岡山県平均とほぼ同じにあるが、国語B、数学Bは低い。  
 県平均と比べ上位層の割合が低く、下位層の割合が高い。  
 授業で取り組んだ(類似)問題については、正答率も高く、無回答も少ない。しかし、問題が長文になると正答率も低く、無回答も増えている。  
 粘り強く問題を考える力が弱い。

県

国語、社会、理科は県平均よりも高く、数学はほぼ県平均と同じにある。  
 全体的に無解答率が低く、意欲的に問題に取り組んでいる。しかし、問題が長文であるとか、説明を求められるもののような問いに関しては、無回答が増えている。

【学習状況調査の結果】

平日にテレビやゲームに費やす時間が長く、学習時間の妨げとなっている。  
 学習時間が確保できている生徒は学力が高く、逆に学習時間が確保できず、テレビやゲームなどに多くの時間を費やしている生徒は学力が低い傾向にある。  
 学年が上がるにつれて、インターネットやメール時間の割合が増えている。  
 家庭学習に費やす時間は、県平均よりも低く、定着している生徒とそうでない生徒がはっきりしている。  
 1～2時間の生徒が多い。  
 苦手な教科の学習時間が短く、休日も平日と学習時間が変わらない。  
 読書に取り組む生徒は県平均に比べ高い。  
 自分で計画を立て、予習、復習に取り組んでいる生徒は正答率が高い。

成果と課題

国語は、読む力、活用の力は高い。しかし、考えて書く力は弱い。特に資料を結びつけて考える事や必要な情報を探して適切な文章を答える問いの正答率は低い。  
 社会は、3、4年生での学習事項は理解が高いが、5、6年生での学習事項はばらつきがあり、歴史分野の正答率が低い。資料活用や社会的思考力の分野は、説明することを含めやや低い。  
 数学は、計算問題の理解力は高いが、少数、分数はやや弱い。説明する力を必要とする問題と割合の理解は弱い。  
 理科は、人体への関心興味があり、考察力もある。化学分野では、考察したり、表現したりする事はよくできている。物理分野では、結果から考察や表現する力が弱い。

課題に対応した改善方法

家庭学習の内容や量について職員間で実態調査を行った。今後、家庭学習の効果的な提示の仕方を考え、ドリル型(基礎基本)および探求型(活用型)の家庭学習を各教科でバランスよく与える。さらに、自主的、計画的に家庭学習が進められるよう、各学年や学級で工夫した取り組みを行う。  
 各教科ともに、考えて書く力、説明する力に課題が見られるため、各教科の授業の中で言語活動(書く活動)を必ず取り入れる。  
 校内研究体制で、思考力・判断力・表現力を高める「活用型」の授業改善を進めている。今年度もすべての教師が活用型の授業実践を考え、1回以上公開する。  
 各教科や、家庭学習や定期考査で、類似問題を活用する。  
 あいさつ運動など引き続き、生徒会活動等生徒の自治的な活動を中心に取り組みを続ける。また、道徳や学活などであいさつに関する題材も取り入れ、あいさつの習慣や意識を高める。

取組の検証方法及び検証時期

2年生で、全国・県の学力・学習状況調査にあわせて、標準学力調査を実施(4月)。  
 定期考査で活用した類似問題の正答率を分析し、課題となった力の伸びの分析。  
 学校評価アンケートの実施(3学期)。  
 職員を対象とした生徒の学力、授業に関するアンケートの実施(年度末)。  
 上記の結果から改善の見直しを図る。

達成目標(数値目標)

どの教科も、平均正答率が県平均を上回る。  
 家庭学習時間が2時間以上の生徒の率を現状の約2倍の60%に増やす。  
 教科の授業が、「わかりやすい」率70%、「好きである」率60%以上を目指す。  
 定期考査での類似問題の正答率60%以上。